

国際バカロレアにみる国語科教育の方向性

—— PYP・MYP・DP「言語A」カリキュラム分析 ——

中 村 純 子*

国語科教育分野

(2018年8月27日受理)

要 旨

国際バカロレア (IB) は、国境を越えた大学入試資格として1968年から認定された世界共通教育プログラムである。IBプログラムの大きな特徴は、構成主義をベースとする学習者中心主義の探究学習を主軸としている点、「グローバルな文脈」で世界の現状と学ぶことの意義を関連づけさせている点、教科を横断して関連付けさせる「重要概念」と、教科領域特有の概念項目を表す「関連概念」を設定している点にある。また、ユニットプランでは「中心的アイデア (初等教育PYP)」や「探究テーマ (中等教育MYP)」を設定し、普遍的で汎用性のある概念を理解させ、概念操作のスキルを向上させている。高等教育DPでは、この概念的思考操作スキルを活用させる最終課題が設定されている。このスキルは、異文化を理解し、グローバルでインターナショナルな視野を持つ地球市民に必須のものである。本論では、我が国の国語科教育もコンテンツ、コンピテンシー・ベースからコンセプト・ベースを目指す方向にあることを示唆した。

キーワード：国際バカロレア，概念理解，言語A，言語と文学，国語科教育

0. 問題の所在

21世紀は環境やテクノロジーの急速な変化に伴い、地域社会や国家といった境界が通用しない課題が山積する時代となってきた。複雑な世界情勢を理解し、新たな課題に向き合う次世代に必要な教育が模索されている。国内でも、平成29年度、30年度に新学習指導要領が打ち出され、主体的対話的深い学びの推進、学び方を学ぶスキルの向上、社会に開かれた学びが提唱されている。国語科教育においても、これまでの「話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと」といった指導項目から、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」が前面に打ち出された。

国際バカロレアでは世界共通のプログラムとして、教育研究の最先端の動向を取り入れ、改訂されてい

る。今後、国語科教育はどのような力をどのように育てて行くべきなのか。その方向性を国際バカロレア教育の「言語A」のカリキュラムを分析し、探っていく。

尚、本論は国際バカロレア機構 (IBO) が発行し、文部科学省が日本語訳を監修した以下の資料に基づくものである。

『IBの一貫教育プログラム 国際バカロレア (IB) の教育とは?』(2015)

『初等教育プログラム PYPの作り方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み』(2016)

『中等教育プログラム MYP：原則から実践へ』(2016)

『中等教育プログラム 「言語と文学」指導の手引

* 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 国語科教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

き』(2016)

『DP：原則から実践へ』(2014)

『ディプロマプログラム (DP)「言語A：文学」指導の手引き』(2014)

『ディプロマプログラム (DP)「言語A：文学」教師用参考資料』(2014)

『ディプロマプログラム (DP)「言語A：言語と文学」指導の手引き』(2016)

探究する人 知識のある人 考える人

コミュニケーションができる人 信念をもつ人

心を開く人 思いやりのある人 挑戦する人

バランスのとれた人 振り返りができる人

このような資質を備えた人材を育成するために、国際バカロレアではどのような授業を展開すべきかを考えていく。授業の中で、教師はこれらの人柄を表すキーワードを児童生徒に繰り返し言葉かけし、目標にさせていく。児童生徒は学習活動に参加することを通して資質を身につけ、日常生活の実の場でも具体的に行動し、発揮していくようになることを目指している。

1. 国際バカロレア教育

国際バカロレア (以下、IB) は、スイス民法典に基づく財団法人、国際バカロレア事務局が運営する世界共通の教育プログラムである。国際的な視野を持ち、多様な背景を持つ人々と共に、地球を共有し公正で平和な世界の構築に資する人間の育成を目標としている。

国境を越えて大学進学する生徒を公平に評価するために、高等教育にあたるDP (Diploma Programme) が1968年に始められた。DPの成績は大学入学資格 (国際バカロレア資格) として、国際的に認知された大学入学資格として活用される。1994年に中等教育にあたるMYP (Middle Years Programme)、1997年に初等教育にあたるPYP (Primary Years Programme) が始まった。

MYP、PYPは全教科とも、その国の母語教育で行うが、DPでは英語が基本言語と設定されている。日本では、1979年からインターナショナルスクールにおけるDP取得者を大学入試に関して高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認定してきた。2013年に文部科学省はDPの6教科のうち4教科を日本語で指導できるデュアル・ランゲージのプログラムとして「日本語DP」が認可を受け、2015年より日本語DPコースが始まった¹⁾。現在、一条校、私学とも、大幅な認定校の増加が図られている。東京学芸大学附属国際中等教育学校では、2010年にMYP校、2015年にDP校として認定された。

2. IB教育の特色

2. 1 育成すべき10の学習者像

IBプログラムでは、国際的な視野を備え、地球を共有することに対する責任を持ち、より平和な世界を築く人間を育成すべく、10の学習者像を掲げている。

2. 2 探究を主軸とした学習方法

探究とは、「児童の理解が現時点でのレベルから、新しい、より深いレベルへと移行するプロセスで、児童または教師によって主導されるもの」と、PYPでは定義している²⁾。

探究は、新しい物事を学ぶ時、学習者が既存の知識との関連を探り、問いや仮説をたてることから始まる。そして、調査、情報収集、実験、分析など、様々なアプローチで自分なりの答えを探り当てていく。この過程が探究学習である。探究学習では、他者との協働的な活動を通して多様な視点や解釈に触れることにより、より豊かな学びが得られる。学習者相互の交流を通して、得られた気づきを深く振り返り、学びとして定着させていく。この学習方法は構成主義の考え方に基づくものである。構成主義では、知識は状況に埋め込まれたものであり、その状況の中で知識を活用することに意味があるとする。学習者は共同体の中で相互作用によって知識を構成していくのである³⁾。IBプログラムでは、児童生徒は常に主体的に「探究」「行動」「振り返り」のサイクルを通じて、生涯学び続ける力を育成していく指導が求められている。

2. 3 グローバルな文脈の理解

急速に変化する世界において人類が直面する課題に取り組むために、「グローバル」で「インターナショナル」な視野を育成することが必要である。「グローバル」とは、地球を全体で共有する一つのものとする「地球規模的」な見方である。「インターナショナル」とは、国家間の関係性から世界をとらえる「国際的」なもの見方である。この二つの側面から物事をとらえる目安として、IBが設定しているのが「グローバルな文脈」である。この「文脈」とは「コンテキスト (Context)」の日本語訳である。「コンテキスト」とは、

物事の背景にある状況や脈絡のことである。つまり、「グローバルな文脈」を理解するということが、物事の背景にある具体的な状況と関連づけて、自己と世界の関わりを捉えることにつながるのである。それは「国際的」「地球規模」といった大きな状況だけではなく、日常生活や社会生活といった「ローカル」なコンテキストも含む。

PYP, MYPでは6つのテーマを掲げて、学習のユニットを構成することとしている。PYPでは「探究のユニット」を「私たちは誰なのか」「私たちはどのような場所と時代にいるのか」「私たちはどのように自分を表現するのか」「世界はどのような仕組みになっているのか」「私達は自分たちをどう組織しているのか」「この地球を共有すること」の6つの「教科の枠を越えたテーマ」で構成することとしている。各ユニットの中に「言語・算数・理科・社会・体育・芸術」の教科の内容を融合させて指導する年間カリキュラムを組むこととしている。

MYPでは、PYPの6つのテーマを「グローバルな文脈」としてのくくりで引き継ぎ、教科のユニット・プランを立てるときに、必ず1つ関連付けることとしている。キーワードは「アイデンティティーと関係性」「空間的および時間的な位置づけ」「個人的表現と文化的表現」「科学および技術の革新」「グローバル化と持続可能性」「公正性と開発」である。語彙の抽象度を上げているが6項目とも同じ内容である(表1)。

このように、学習者は常に学習内容と「グローバルな文脈」を結びつけて学ぶことを通して、自分がなぜそれを学んでいるか、学習の意義を理解していくのである。新しく学んだ情報や抽象的な概念を実生活や世界情勢などの具体的な状況にあてはめることで、理解

がよりいっそう促されるのである。

表1 PYPとMYPのグローバルな文脈の関係

PYP 教科の枠を越えたテーマ		MYP グローバルな文脈
私たちは誰なのか。	→	アイデンティティーと関係性
私たちはどのような場所と時代にいるのか。	→	空間的・時間的位置づけ
私たちはどのように自分を表現するのか。	→	個人的表現と文化的表現
世界はどのような仕組みになっているのか。	→	科学技術の革新
私たちは自分たちをどう組織しているのか。	→	グローバル化と持続可能
この地球を共有すること。	→	公平性を発展

IBO (2016) 『MYP: 原則から実践へ』 p 25

2. 4 概念理解と教科を横断する学際的学習

「概念」とは事物の持つ固有の性質から共通する要素を抜き出した普遍的で抽象的な意味内容である。IBプログラムでは、概念から理解を深めるために教科を横断して活用できる「重要概念」を、PYPでは8項目(表2)、MYPでは16項目(表3)、定めている。

PYPの「重要概念」は「特徴、機能、原因、変化、関連、視点、責任、振り返り」である。年間指導計画で探究ユニットを構成するとき、バランス良く配置することとする。

MYPの「重要概念」は「美しさ、変化、コミュニケーション、共同体、つながり、創造性、文化、発展、形式、グローバルな関わり、アイデンティティー、論理、ものの見方、関係性、体系、時間、場所、空間」である。ユニット・プランに必ず一つ選択し、探

表2 PYP 重要概念

重要概念	重要な問い	定義	関連概念の例
特徴	それはどのようなものなのか。	すべてのものは、観察、特定、描写そして分類可能な、認識できる特徴をもつ形式があるという理解	特性 構造 類似点 相違点 傾向
機能	それはどのような働きをするのか。	すべてのものには、調査可能な目的、役割、行動方法があるという理解	行動 コミュニケーションパターン 役割 システム
原因	それはなぜそうなのか。	物事は理由なく起こることはなく、起因関係があり、行動には結果が伴うという理解	結果 順序 パターン 影響
変化	それはどのように変わっているのか。	変化とは1つの状態からまた別の状態へ移るプロセスであり、普遍的で不可避なものであるという理解	適応 成長 サイクル 連続性 変容
関連	それは他のものとのどのようにつながっているのか。	私たちは、個々の要素による行動が他のものに影響を及ぼす相互作用システムをもった世界に生きているという理解	関係性 ネットワーク 恒常性 相互依存性
視点	それにはどのような見方があるか。	知識はものの見方によって制御されており、異なるものの見方は異なる解釈・理解・発見を生み、ものの見方は個人的、集団的、文化的そして学問的でありえるという理解	主観性 真理 信念 意見 偏見
責任	私たちにどんな責任があるのか。	人々は自分の理解にもとづいて選択を行い、その結果として人々がとる行動は違いを生むという理解	権利 市民権 価値観 正義 主導権
振り返り	私たちはどのように知るのか。	知り方にはさまざまな方法があること、私たちは、出した結論を振り返り、推論方法を考慮し、私たちが考慮した証拠の質と信頼性を考察することが重要だという理解	再調査 解釈 証拠 責任 行動

IBO (2016) 『PYPのつくり方』 pp.21-23より作成

表3 MYP 重要概念

重要概念	定義
美しさ	美や審美眼の特性、創造、意味、感じ方。芸術、文化、自然に対して批判的な鑑賞や分析を行う。
変化	ある形態、状態、価値観から別の形態、状態、価値観へと転換あるいは移動すること。原因、過程、結果を理解し評価する。
コミュニケーション	メッセージ、事実、アイデア、シンボルなどのやりとりや伝達。送り手が特定の受け手にメッセージとして情報や意味を伝達する活動。共通の「言語」(文語、口語、非言語)が必要である。
コミュニティ	空間、時間、関係という枠で捉えられ、個々が近接して存在している集団のこと。例えば、特定の特性や信条、価値観を共有する人々の集団や、特定の生息地で助け合って暮らす動物の群れなど。
つながり	人、物、有機物、アイデアの間の結びつきや結合、関係性。
創造性	今までにない考えを生み出し、すでにあるアイデアを新しい観点から考える過程。問題に対して創造力に富む対応を発展させてアイデアの価値を認識する能力。「創造性」は、結果や生成物、解決策だけではなく、過程にも顕著に現れる。
文化	人間のコミュニティによって創造されるもので、学習・共有されたさまざまな信念、価値観、関心、態度、生成物、考え方、行動を含む。「文化」の概念はダイナミックで有機的である。
発展	成長、進展、進化につながる行動や過程。改良を繰り返しながら発展する。
形式	作品の形や基本構造。組織や本質、外観も含む。
グローバルな相互作用	世界をひとつの全体として見たとき、個人やコミュニティがお互いや、それを取り囲む環境(人工、自然)との間で持つ「つながり」に焦点を当てた概念を指す。
アイデンティティ	同じであり続ける状態、あるいは同じであり続けるひとつの事実を指す。個人、集団、物事、時代、場所、シンボル、スタイルを定義づける特徴的な性質のこと。それは内外からの影響を受けて観察の対象となったり、作り上げられたり、主張を繰り返すことで定着し、形作られる。
論理	論理的に考える方法。議論を組み立てて結論に達するために用いられる原理の体系。
ものの見方	状況、物、事実、考え、意見を観察するときの立ち位置。それぞれ個人や集団、文化、学問領域と関連づけられる。多様な「ものの見方」がしばしば、複数の表現や解釈となって現れる。
関係性	性質、物、人、考えの間にある結びつきや関連性。関係の中にどんな変化が起きても結果として現れる。小規模で作用する「関係性」もあれば、人間社会や地球の生態系など、大きなネットワークやシステムに広範に影響する「関係性」もある。
システム	相互に作用し依存している要素のまとまり。人間や自然環境、つくられた環境に構造と秩序をもたらす。「システム」は、静的であることもあればダイナミックなこともあり、単純なことも複雑なこともある。
時間、場所、空間	本質的につながっており、人、物、考えの絶対的あるいは相対的位置を意味する。「時間、場所、空間」は、位置についての知識(「どこで」や「いつ」)をどのように構築し、用いるかに焦点を当てる。

IBO (2016) 『MYP: 原則から実践へ』 pp67-69 より作成

究テーマに関連付けていく。複数の教科で同じ概念を扱うこともある。つまり、同時並行で学習する複数の教科領域の知識や経験が概念によって有機的に関連づけられるのである。さらに、複数の教科で、それぞれの教科特有の視点から概念学習を繰り返すことを通して、多様性のある豊かな理解が学習者の中に定着する。概念理解は、教科の枠にとらわれず広い視野で、教科横断的、学際的な学習を可能にする。

こうして育まれた概念を活用する思考スキルがDPの最終課題で発揮されるのである。

3. IBプログラムにおける「言語科」の特徴

3. 1 母語教育重視

IBでは、異文化に対する理解と国際的な視野の形成を促すため、2言語以上の言語を習得をさせることを基盤としているが、母語教育を最も尊重している。

そこで、PYPとMYPプログラムでは、全教科ともその国の第1言語で指導することを認めている。DPでは第1言語「言語A」と第2言語「言語B」と科目を分けており、第1言語は必ず生徒の母語で行うこととしている。デュアルランゲージ「日本語DP」でも、6教科中4教科は日本語で、2教科は英語で授業する

ことを義務づけている。なぜなら、母語を発達させることは認知的な発達を促し、他の言語習得に役立つからである。また、母語教育は学習者は属する国の言語や文化に誇りを持たせることができ、文化的アイデンティティを形成する上できわめて重要である。

3. 2 「言語A」が目指す学び

「言語A」の中の各教科名は、PYPは「言語」、MYPは「言語と文学」、DPは「文学」「言語と文学」「文学とパフォーマンス」である。これら全ての教科の目標として共通しているのはIBプログラムの根幹にある批判的思考と創造的思考の育成である。国際的な視野を持ち、多文化共生の社会で課題解決をしていくには、物事を吟味分析して考察する批判的思考と創造的な発想力が必要である。言語科では、これらの思考に必要な言語スキル、分析スキル、コミュニケーションスキルを育成することを指導目標に掲げている。これらのスキルを活用し、探究に基づく協働的学習を通して、概念を獲得していくのである。この学習活動で、言語は概念の発達を促す知的な枠組みを提供する。言語とは、分析、思考、自己表現、創造性、学習、リフレクション、社会的相互交流の手段なのである。文学やノンフィクション、多様なメディア情報を探究する

学習を通して、言語語を活用し、批判的で創造的なアプローチの仕方を学んでいくのである。

3. 3 6つの言語スキルと指導目標

言語を活用するスキルは、「学習方法（Approach to Learning 以下 ATL）」のスキルの一つ、「コミュニケーションスキル」に位置づけられている。ATLとは、全教科の学習で活用する「学び方を学ぶ」方法である。スキルのカテゴリーは「思考スキル、社会的スキル、コミュニケーションスキル、自己管理スキル、リサーチスキル」である。これらのスキルはPYPからDPまで全てのプログラムで指導を継続させていく。

この「コミュニケーションスキル」では、言語の学習要素を「口頭言語」「視覚言語」「書記言語」の3つとしている。さらに、言語の意味を受け止めて解釈する「受容的側面」と、意味を創造し共有する「発信的側面」に分け、言語活動を表4のように設定している。

ここで、「スキル」と「目標及び評価」の関係性を分析すべく、PYP、MYP、DPの各教科が掲げる項目を一覧にまとめた（表5）。

PYP、MYPでは、口頭言語「聞くこと・話すこと」、視覚言語「見ること・発表すること」書記言語「読むこと・書くこと」がスキルに掲げられている。さまざまな話し言葉のメッセージを聞いて理解する能力、さまざまな書き言葉や多様なメディアによる情報を見たり読んだりして理解する能力、話し言葉と書き言葉、

およびデジタル・メディアの映像などを活用して、自分の考えを明確に説得力をもって表現できる能力の指導は初等・中等の段階で充実を図ることが目標とされていることがわかる。

PYPでは「目標」も同じように3つの言語モードで示されている。目標に基づく評価においても、それぞれの言語モードの発達段階を示す5段階のフェーズを提示している。

それに対してMYPでは、指導スキルは三つの言語モードであるが、「目標」は「分析」「構成」「創作」「言葉の使用」と言語活動を通して獲得する思考スキルが示されている。これは、MYPからDPへの架橋的な措置と考えられる。

DPでは口頭言語と書記言語のモードは「言語スキル」にまとめられている。視覚的スキルだけは特化して示されている。そして、「批判的アプローチ」「文学的表現技法」「テキストの詳細分析」と批判的分析を促すスキルが打ち出されている。それに伴い、「目標」も「知識と理解」「応用と分析」「統合と評価」が掲げられている。「適切な言葉遣いおよびプレゼンテーションの選択と使用」は学習者自身の語彙力、文法の活用レベルなどに関する項目である。

このように言語をよりよく活用し、批判的思考と創造的思考を獲得していくために、発達段階に応じたカリキュラムが構成されていることがわかる。

表4 コミュニケーションスキル 言語学習の要素

言語の学習要素	受容的：意味を受け止め提案する。	発信的：意味を創造し共有する。
口頭言語	聞くこと	話すこと
視覚言語	見ること	発表すること
書記言語	読むこと	書くこと

IBO (2016) 『MYP：「言語と文学」指導の手引き pp20-22 より作成

表5 PYP, MYP, DPにおけるスキルと目標

	PYP「言語」	MYP「言語と文学」	DP「文学」	DP「言語と文学」
スキル	口頭言語 ：聞くことと話すこと 視覚言語 ：見ることと発表すること 書記言語：読むこと 書記言語：書くこと	口頭のコミュニケーション 聞くこと 話すこと 文書によるコミュニケーション 読むこと 書くこと 視覚的なコミュニケーション 見ること 見せること	言語スキル 批判的アプローチ 文学的表現技法 視覚的スキル	言語スキル テキストの詳細分析 視覚的スキル
目標	口頭言語 ：聞くことと話すこと 視覚言語 ：見ることと発表すること 書記言語：読むこと 書記言語：書くこと	規準A：分析 規準B：構成 規準C：創作 規準D：言語の使用	1 知識と理解 2 分析 統合及び評価 3 適切な言葉遣いおよび プレゼンテーションの 選択と使用	1 知識と理解 2 応用と分析 3 統合と評価 4 適切な言葉遣いおよび プレゼンテーションの 選択と使用

IBO (2016) 『PYPのつくり方』 p26

IBO (2016) 『MYP：「言語と文学」指導の手引き』 pp20-22

IBO (2014) 『DP「言語A：文学」指導の手引き』 pp21-22 より作成

3. 4 視覚スキル

ここで、前項で指摘した「視覚スキル」について論じる。日本語訳がそれぞれPYPでは「視覚言語」、MYPでは「視覚的コミュニケーション」、DPでは「視覚的スキル」と異なるが、ここでは「視覚スキル」と統一して論じていく。

「視覚スキル」とは、映像作品やマルチメディアを解釈し、制作し、表現するスキルである。

視覚テキストには、活字テキストと同様に、アイデア、価値観、信念などのメッセージ情報が効果的に構成されている。この情報を批判的に分析するために、映像の機能や構成を探究する。視覚テキストが意味に影響を与える効果や、視聴者の考え方や感じ方をどのように形成するのかを分析していくのである。分析の成果は言語で表現することによって、リフレクションが可能となり、さらに考察を深めることができる。

そこで得られた映像の機能や構成についての知見を自らの情報発信に活用する。動画編集ソフトで編集する映像やプレゼンテーションのためのスライドなどを制作するスキルが「発表すること」である。作品は状況や目的、オーディエンスに応じて、分かり易くアイデアを伝えるために、言語を用いて綿密に構想しなくてはならない。制作の企画では映像やイラストだけではなく、脚本や絵コンテなど言語で表現することが求められる。映像は言語をベースに構成されているとも言えよう。映像と言語の相互作用についての理解を深めていくことが「言語A」で求められているのである。

視覚スキルを育む教材として、漫画、広告、ポスター、写真、新聞、雑誌、映画、アニメーション、テレビ番組、ゲーム、ウェブサイトなどのマルチメディアがあげられている。従来の活字テキストだけを教材としていた従来の国語科教育より、教材観が広がっていく。また、視覚スキルではデジタル映像の制作で、ICTの活用スキルも求められる。芸術科、情報科の領域を含んだ学際的なアプローチが可能となる。このように視覚スキルを獲得することによって、学習者は情報源を増やし、表現力を発揮できるようになるのである。

4. 初等・中等・高等教育プログラムにおける「言語A」カリキュラム分析

4. 1 初等教育プログラム (PYP) における「言語」科

PYPプログラムの特徴は、前項で示した6つの「教科の枠を越えたテーマ」毎に「探究のユニット」を構成していく点にある。各ユニットでは指導すべき「概

念、スキル、知識、姿勢、行動」の要素を組み合わせ、そのユニットで獲得すべき学びのテーマ「中心的アイデア」を設定し、探究させていく(表6)。

「中心的アイデア」とは、そのユニットの学びの本質を表し、普遍的で汎用的な概念を表すものである。

例えば、小学1年生の「私達は自分たちをどう組織しているか」というテーマで「私達の学校」と題した探究ユニットを設定した場合、「中心的アイデア」は「学校は、私達が共に学び、遊ぶことができるように組織されている。」と設定できる。これをユニットの最初に学びのゴールとして児童に示す。この「中心的アイデア」を理解するために、「学校とは何をすることなのか。」「学校ではどんな人がどんな仕事をしているのか。」といった問いを探究する学習活動を行う。こうした活動の中で、児童は話し合いやインタビューなどの言語活動を体験する。このように、言語能力は、「言語の学習」といった教科領域にとらわれずに、「言語を通じた学習」によって総合的に獲得していくことが理想とされている。

「言語」科として押さえるべき点は、言語の性質や構造の理解、言語の活用法、言語の効果と多様な影響力、言語の多様性といった言語の知識とスキルを認識を指導していくことにある。これらの知識は体験から気づきを促し、言語運用能力、コミュニケーション力を高めていく。また、自己表現も含め、言語と文学を創造的に学ぶことを通して、想像力と創造力を育むことも目標としている。

4. 2 中等教育プログラム (MYP) における「言語と文学」科

MYPでは様々な異なるタイプのテキストを扱うことが求められている。小説、ノンフィクション、詩、戯曲、視覚テキストとジャンルのバランスを取ることが推奨されている。特に、文学は小説だけでなく、伝記、グラフィックノベルや映画など文学の要素を含むジャンルを広く設定している。また、多文化理解を促すために世界文学を必ず扱うこととしている。

ユニットは全教科共通して、教科を横断して設定された16の「重要概念」と、教科の専門領域に関わる「関連概念」と「グローバルな文脈」を組み合わせ、「探究テーマ」を設定して、ユニットを構成する(表7)。

「重要概念」は2. 4項で述べたように、16の概念が設定されている。「言語と文学」では特に、「コミュニケーション」「つながり」「創造性」「ものの見方」を重点的に扱うことが指定されている。「関連概念」とは、中等教育から専門性が増す各教科の本質を表す

表6 PYP「言語」教科構造

PYP 重要概念	教科「言語」についての観点				
特徴 (それはどのようなものなのか)	すべての言語は、独自の特徴と構造をもっている。特徴は、書記言語か口頭言語かによって異なる場合がある				
機能 (それはどのような働きをするのか)	私たちが使用している言語の種類は、状況・目的・受け手・ジャンルによって異なる				
原因 (それはなぜそうなのか)	言語は人間の活動の基本である。言語の発達には、多くの要因が影響を与える。				
変化 (それはどのように変わっているのか)	言語は静的なものではなく、絶えず変化するものである				
関連 つながり (それは他のものとのようにつながっているのか)	言語は、それぞれの社会の内部、異なる社会の間、そしてすべての社会全体において、関連を与える主要なシステムである。				
視点 ものの見方 (それにはどのような見方があるのか)	言語はさまざまな方法で解釈し、表現することができる。特に文学は、世界についての、文化的・歴史的・個人的な観点を提供し、異なる解釈を推奨するものである。				
責任 (私たちにどのような責任があるのか)	言語は強力なもので、肯定的、または否定的な強い効果をもたらす。したがって、責任をもって使用する必要がある				
振り返り (私たちがどのように知るのか)	言語を通じ、私たちは自分の経験と知識についての振り返りを行うことができる。				
学習の方法 (Approaches To Learning) スキル					
思考スキル…知識の習得・理解・応用・分析・統合・評価・弁証法的思考・メタ認知 社会的スキル…責任を受け入れること・他者を尊重すること・協力すること・対立を解決すること・グループでの意志決定・グループ内のさまざまな役割を担うこと コミュニケーションスキル…聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと・見ること・発表すること・非言語コミュニケーション 自己管理スキル…粗大運動技能・微細運動技能・空間認識・準備計画・時間の管理・安全性・健康な生活・行動の規範・情報に基づく選択 リサーチスキル…疑問を出すこと・観察すること・計画をたてること・データを集めること・データを記録すること・データを整理すること・データを解釈すること・調査結果を発表すること					
「言語」の学習要素 (コミュニケーションスキル)					
口頭言語：聞くことと…指示を聞くこと。他者の話を聞くこと。情報を聞き取ること。話すこと…はっきり話すこと。口頭で報告すること。アイデアを明確に、論理的に表現すること。意見を述べること。 視覚言語：見ること…視覚教材やマルチメディアを解釈し、分析すること。画像と言語が相互作用してアイデアや価値観、信念を伝達する方法を理解すること。自分の視覚体験について情報に基づいた選択を行うこと。 発表すること…さまざまな目的と受け手に合わせ、視覚資料やマルチメディアを作成すること。さまざまな視覚メディアを使い、情報やアイデアを伝達すること。効果的な指示や発表を行うために、適切なテクノロジーを活用すること。 書記言語：読むこと…情報を得るために、そして楽しむためにさまざまな情報源を読むこと。読んだ内容を理解すること。推理し、結論を出すこと。現実と想像の世界の両方を拡張し、世界に対する知識と理解を獲得する。 書くこと…情報と観察を記録すること。メモを取ったり、言い換えたりすること。要約を書くこと。報告文を書くこと。日記や記録をつけること。物語の意味や構造を理解し、登場人物を創造し想像の世界を書くこと					
姿勢 感謝・根気・自信・協調・創造性・好奇心・共感・熱意・自主性・誠実・尊重・寛容					
行動					
責任ある行動の中での責任あるふるまいを通じた、より深い学習の証明。他の基本要素の実践の結果として表れるもの。行動サイクル 選択→行動→振り返り					
「探究のユニット」PYPの教科の枠をこえたテーマ グローバルな文脈					
私たちは誰なのか	私たちはどのような場所と時代にいるのか	私たちはどのように自分と表現しているのか	世界はどのような仕組みになっているのか	この地球を共有するということ	私たちは自分たちをどう組織しているのか
総括的評価 形成的評価 (評価規準は言語の総合的な目標の発達段階のフェーズで示されている)					
評価方法…観察・パフォーマンス評価・プロセス重視の評価・一問一答形式テスト・オープンエンド型の課題 評価ツール…ルーブリック (評価指針表)・模範例・チェックリスト・事例記録・コンティニューム (評価測定法)					

IBO (2016)『PYPのつくり方』より作成

表7 MYP「言語と文学」教科構造

MYP「言語と文学」 ねらい					
<ul style="list-style-type: none"> ・言語を、思考、創造性、振り返り、学習、自己表現、分析、および社会的な相互作用の手段として利用する。 ・さまざまな文脈で、聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、見ること、発表することに関わるスキルを身につける。 ・文学および非文学のテキストを学習し分析することへの、批判的で創造的な個人的なアプローチを探究する。 ・歴史上のいろいろな時代とさまざまな文化のテキストに取り組む。 ・文学および非文学のテキストを通して、自分の母国や現在住んでいる国の文化、その他の文化を探究し、分析する。 ・多様なメディアや伝達様式 (モード) を通じて言語を探究する。 ・生涯にわたる読書への関心を育む。 ・実際のさまざまな文脈の中で、言語的・文学的な概念とスキルを応用する。 					
重要概念			関連概念		
「コミュニケーション」「つながり」「創造性」「ものの見方」「文化」「発展」「美しさ」「変化」「コミュニティ」「形式」「グローバルな相互作用」「アイデンティティー」			「受け手の受容」「登場人物」「文脈」「ジャンル」「テキスト間の関係性」「視点」「目的」「自己表現」「設定」「構成」「スタイル (文体)」「テーマ」		
グローバルな文脈					
アイデンティティーと関係性	空間的・時間的位置づけ	個人的表現と文化的表現	科学技術の革新	グローバル化と持続可能性	公平性と発展
学習の方法 (Approaches To Learning) スキル					
コミュニケーションスキル…口頭でのコミュニケーションスキル…「聞くこと」「話すこと」 文書によるコミュニケーションスキル…「読むこと」「書くこと」 社会的スキル…協働 視覚的なコミュニケーション…「見ること」「発表すること」 自己管理スキル…整理整頓・情動・振り返り リサーチスキル…情報リテラシー・メディアリテラシー 思考スキル…批判的思考・創造的思考・転移					
ユニット 重要概念…関連概念…グローバルな文脈					
<p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">探究テーマ</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">探究の問い：事実的問い・概念的問い・議論的問い</p>					
評価目標					
A分析	B構成	C創作	D言語の使用		
i. テキストの内容、文脈、言語、構造、技法、およびスタイル (文体) と、複数のテキスト間の関係性を分析する。 ii. 作者の選択が、受け手に与える効果を分析する。 iii. 例、説明、用語を用いて、意見や考えを正当化する。 iv. ジャンルやテキストにおいて、または複数のジャンルやテキストにわたって特徴を関連づけることで、類似点と相違点を評価する。	i. 文脈と意図に応じた組織的構造を採用する。 ii. 意見や考えを、持続的で一貫性のある、論理的な方法で整理する。 iii. 執筆や引用のフォーマットを利用して、文脈と意図に適した発表の体裁を作成する。	i. 創造プロセスへの個人的な関わりから生じる新しいものの見方やアイデアを探究し、批判的に振り返りながら、洞察、想像力、感受性を示すテキストを創作する。 ii. 言語的、文学的、視覚的な表現の観点から、受け手に対する影響を認識したスタイル (文体) を選択する。 iii. アイデアを育むために、関連する詳細情報と事例を選び出す。	i. 適切で多様な語彙、構文、表現形式を使用する。 ii. 文脈と意図に適した言語使用域 (レジスター) とスタイル (文体) で書き、話す。 iii. 正しい文法、統語法、句読法を用いる。 iv. 正確に綴り (アルファベット言語)、書き (文字言語)、発音する。 v. 適切な非言語的コミュニケーション技法を利用する。		

IBO (2014)『MYP「言語と文学」指導の手引き』より作成

もので、各教科とも12項目、設定されている。「言語と文学」の関連概念は、「受け手側の受容、登場人物、文脈、ジャンル、テキスト間の関連性、視点、目的、自己表現、設定、構成、スタイル（文体）、テーマ」である。（表8）

「探究テーマ」はそのユニットを通して学ぶ概念理解をグローバルな文脈に組み込み、授業で探究する学習の目標となるものである。ユニットを構成した指導者が意図する学習内容の本質を表す。

ユニットの構成では、探究のテーマを用いて、三つの問いを立てる。「事実的問い」は事実やトピックに確認する問いである。テキストに書かれていることを一つの事実と捉え、基本的な読解を促していく。「議論的問い」は、テキストの主題に迫るもので、多様な解釈が予想され、議論を通してものの見方を深めていく問いである。「概念的問い」は探究のテーマや重要

概念に迫る問いである。これらの三つの問いに取り組み課程で育むATLスキルを明記しておく。

ここで、タイのNISTインターナショナルスクールの山田浩美教諭が2017年10月に実践した魯迅の『故郷』のユニットを例に説明する（表9）。この実践は論者が2017年10月に学校訪問で取材したものである。

本ユニットの探究テーマは「文学作品は状況の中で生きる人間を描き出す。」である。これは、『故郷』が1920年前後の中華民国設立期、袁世凱による軍事政権下で苦しむ民衆の姿を象徴的に描いていることから、文学作品の果たす役割を探究するために設定されている。この探究を促す三つの問いとして、まず、基本的な作品の読解として、「事実的問い」で登場人物の描かれ方を分析させる。さらに、探究テーマに迫る「概念的問い」では、「社会状況」を主語にしてコンテキストが小説に与える影響を考察させる。「議論的問

表8 MYP「言語と文学」関連概念

関連概念	定義
受け手側の受容 Audience imperatives	作者が意図して表現したテキストに対する受け取る相手（読者・聞き手・視聴者）の反応を考える。ユーモア、認識、共感、反感、批判、共鳴、美しさ、ムード、雰囲気、ジェンダーの観点など、受け手は様々な立場に応じて、多様な解釈、受容の仕方をする。
登場人物 Character	作品に登場する人物を分析する。登場人物の行動、話し方、外見から、人物像を推論する。登場人物の変化、影響、対立、主役、ライバル、人柄、脇役、ストックキャラクター（典型的な人物像、ステレオタイプ）について探究し、それぞれの果たす役割を考える。
文脈 Context	作品が制作された、社会的、歴史的、文化的な背景のこと。その時代の人々の生き方や慣習、信念を考察する。作品の形式、内容、目的、受け手の評価はその国や時代、文化の影響を受ける。作品の外側に焦点を当てることでより多角的な分析が可能となる。
ジャンル Genre	文学や映画の共通の特徴や表現技法もつグループ、カテゴリーのこと。「フィクション」では、物語、小説、神話、風刺、伝説、漫画、映画脚本、映画、テレビドラマなどがある。「ノン・フィクション」では、自叙伝、伝記、紀行文学、エッセイ、書簡、文学的ノンフィクション、スピーチなどがある。それぞれのジャンルの表現技法、形式、スタイル（文体）、ストーリー展開、性格描写、基調、ムード、雰囲気、レジスター（言葉の使い方）について分析する。例えば、散文では「伏線、回想、小説における意識の流れ」など、詩では「韻律、押韻」など、戯曲では「台詞、語り、独白、傍白、ト書き、声、動き、ジェスチャー、空間の使い方、コスチューム、小道具、照明、セット、音響」など、映像作品では「視覚イメージ、レイアウト、ナラティブ/語りの技法」などを分析する。
テキスト間の関連性 Intertextuality	ある作品と別の作品との関連のこと。神話をベースに書かれた小説や小説をもとに作られた映画など、どの部分が参照されたり引用されているか、意味がどう変わっているか、作品相互の関連性を分析する。
視点 Point of view	作品の語り手の立場を考える。物語の文章が一人称なら主人公の視点から、三人称なら第三者的な視点から語られていると考える。その語り手の言葉遣い、声のトーン、ものの見方考え方を分析する。説明文なら筆者の立場から、映像作品ならカメラワークから、どのような考えに基づき、何を語ろうとしているのかを考える。
目的 Purpose	その作品の作者の意図のこと。作品の意味や論点、ジェンダー観、時代性、文化的な価値、偏りがあるか、説得力があるかといった観点から作品の技法や機能をクリティカルに探究する。
自己表現 Self-expression	学習者自身の表現活動のこと。文字や文章、音楽、ダンス、デザイン、映画など、感情や考えを表現する方法はいろいろある。表現されたものには、アイデンティティ、声、インスピレーション、想像力、感受性、クリティカルな視点など、探究する中で獲得した本質的な理解が含まれる。
設定 Setting	本、映画、演劇など、ストーリーが展開する時間と場所のこと。その設定に表れるムードや雰囲気を分析する。
構成 Structure	作品を組み立てる要素のつながり方や展開の仕方のこと。作者のアイデアの発展のさせ方をプロット、ナラティブ、談話、形式、変化、議論、統語法、伏線、回想などのキーワードを使って分析する。
スタイル Style	文体、作者の言葉の使い方、語り口、文章の特徴のこと。作者の意図を効果的に伝えるために、どのような言語的表現、修辭的技巧、文学的特徴が用いられているのかを考える。語の選択、構文、比喩的表現、反復、モチーフ、言及、イメージ、象徴的表現など。
テーマ Theme	作者が伝えたいメッセージ、主題のこと。

IBO (2014)『MYP「言語と文学」指導の手引き』pp52-54より作成

表9 魯迅『故郷』ユニット例

重要概念	関連概念	グローバルな文脈
ものの見方	登場人物 文脈	アイデンティティと関係性
探究テーマ		
文学作品は状況の中で生きる人間を描き出す。		
事実的問い：登場人物はどのように描かれているか？	ATLスキル	
概念的問い：社会状況は小説にどう影響をもたらすのか？		
議論的問い：時代や地域によって小説の解釈はどう変化するのか？		
		批判的思考スキル 創造的思考スキル

い」では、時代や地域が異なる人々が小説に対して多様な解釈をすることを考えさせていく。作品が書かれた1920年前後の中華民国の時代状況と日本の大正時代の社会状況を調べ、比較させていた。このような学習から、社会的な「文脈」が「登場人物」の描写に与える影響を考慮し、作家の「ものの見方」や地域や時代が異なる人の「ものの見方」を考えさせていく。それは、作家や読者自身の「アイデンティティー」と世界との「関係性」について考察することにつながって

いる。このようにユニットでの学習を通じて、概念理解を育んでいくのがMYPの特色である。

4. 3 高等教育プログラム (DP) 「言語A」における「文学」「言語と文学」

DP「言語A」では「文学」「言語と文学」「言語とパフォーマンス (演劇)」の3科目が設定されている。2013年に、「デュアル・ランゲージ」の認定を受けたのは「文学」「言語と文学」である。表10では2教科

表10 DP「文学」「言語と文学」教科構造

DP「文学」「言語と文学」 ねらい 共通項1～7											
1. 異なる時代、スタイル (文体) およびジャンルからの多様なテキストを紹介する。 2. 個々のテキストを綿密かつ詳細に分析し、関連性のあるものと結びつけることができる能力を養う。 3. 表現力 (口述および記述によるコミュニケーション) を養う。 4. テキストが書かれ、受け取られた文脈の重要性を理解するよう促す。 5. テキストの学習を通じて、文化的背景の異なる人々の異なるものの見方があることや、それらの見方がどのように意味を構成しているかへの認識を促す。 6. テキストの格調高さや、様式的、美的な質の味わいを理解するよう促す。 7. 生徒が言語と文学に対して、生涯にわたって関心および喜びをもつよう促す。											
「文学」						「言語と文学」					
8. 文学批評に使用される技法について生徒の理解を促す。 9. 生徒が文学作品を独自に批評する力と、その自分の考えを裏づけをもって構成する能力を養う。						8. 言語、文化および文脈が、テキストの意味の構築のされ方にどのように影響しているかについての理解を育む。 9. テキスト、受け手、目的の間のさまざまな相互作用について、批判的に思考するよう生徒を促す。					
指導の方法 コース特定のスキル											
言語スキル・批判的アプローチ・文学的表現技法・視覚スキル						言語スキル・テキストの詳細分析・視覚的スキル					
学習の方法 (Approaches To Learning)											
コミュニケーションスキル		社会性スキル		自己管理スキル		リサーチスキル		思考スキル			
シラバス											
パート1 翻訳作品 多様な文化の異なる観点 文学作品における文化の役割 パート2 精読学習 作品解釈 作品の重要な要素に関する詳細な分析 パート3 ジャンル別学習 文学的表現技法 作品比較 パート4 自由選択 選択肢1 フィクション以外の散文の学習 選択肢2 新たなテキスト (漫画・ハイパーテキストなど) 選択肢3 文学と映画						パート1: 文化的な文脈における言語 パート2: 言語とマスコミュニケーション パート3: 文学—テキストとコンテキスト パート4: 文学—批判的学習					
評価目標											
1. 知識と理解 2. 分析、統合および評価 3. 適切な言葉遣いおよびプレゼンテーションスキルの選択と使用						1. 知識と理解 2. 応用と分析 3. 統合と評価 4. 適切な言葉遣いおよびプレゼンテーションスキルの選択と使用					
点数配分		文学						言語と文学			
最終課題	試験問題1 文学論評	試験問題2 小論文 パート3	記述課題 パート1	口述コメン タリー パート2	口述プレゼ ンテーション パート4	試験問題1 テキスト比 較分析	試験問題2 小論文パー ト3	記述課題1 学習素材か ら	記述課題2	口述コメン タリー パート4	口述課題 (発展) パート1・2
理解と解釈	5							課題の 解説 5	概要 2		
知識と理解		5	6	詩5 作品5	10		5	課題と 内容 5		10	10
テキストの理解と 比較 言語の使われ方について の理解						5					10
作者の選択について の認識	5		6	5							
スタイル (文体) 上の特徴およびその 効果についての 理解						5	5			10	
設問に対する答え 当該ジャンルの文学 的表現技法について の認識		5		5			5		8		
構成と展開	5	5	5	5		5	5	構成 5	構成と 議論 5	5	5
言語	5	5	5	5	10	5	5	言語と スタイル (文体) 5	言語と スタイル (文体) 5	5	5
振り返りの要件を 満たす プレゼンテーショ ン			3								10

IBO (2014) 『DP「言語A：文学」指導の手引き』『DP「言語A：言語と文学」指導の手引き』より作成

の構造を並べて示す。

4. 3. 1 「言語A：文学」

「文学」は文学について学ぶコースである。テキストは、「指定作家リスト」(PLA: Prescribed list of authors)から、指導者が選書し、丸ごと1冊を読んでから授業に入ることを課している。選書にあたっては、異文化の視点を学び、多文化理解を促すために、翻訳作品を読むことが推奨されている。また、ジャンル、地域、年代が重ならないように選書していくことも求められている。

この教科では人の世の情や営みを描き出す文学作品の表現技法を探究し、芸術性を味わい、深く解釈し、批判的に分析し、リフレクションを通して考察を深めることが求められている。学習者は文学批評のアプローチの仕方を習得していく。

「文学」のコースは次のように4つのパートに分かれている。

- パート1：翻訳作品 (Works in translation)
- パート2：精読学習 (Detailed study)
- パート3：ジャンル別学習 (Literary genres)
- パート4：自由選択 (Options)

パート1では時代と場所が異なる翻訳作品を2、3冊、扱う。作品に対して、多様なアプローチで分析批評を行うが、特にその作品が書かれた国の文化的コンテキストの分析を重視している。インターナショナルな多文化理解を育むことが求められている。

パート2は詩、随筆、古典、戯曲など多様なジャンルの作品を選書することとされている。作品の構成要素や技法の詳細な分析を通して解釈を深め、クリティカルなもの見方の習熟が求められている。

パート3では小説などの同じジャンルから3、4冊を取り上げ、文学的表現技法や文学的特徴を分析し、複数の作品の共通点・相違点を比較分析させていく。

パート4は、テレビドラマ、漫画、映画など多様なメディアで表現されている文学をとりあげ、分析の成果をプレゼンテーションしていく。

4. 3. 2 「言語A：言語と文学」

「言語と文学」では、テキストの内容をその背景にあるコンテキストに照らして分析し、言語の意味がどのように解釈されるのかを考察することに重点をおいた教科である。テキストを読者との関係性の中で看取るのではなく、双方を取り巻く時代や文化と絡めて考察させるのである。

「言語」に関する4つのパートは次の通りである。

- パート1 文化的文脈における言語
- パート2 言語とマスコミュニケーション
- パート3 文学 テキストと文脈
- パート4 文学 批判的学習

パート1では、政治家の演説、政府広報、SNSメッセージ、業界用語や専門用語などを扱い、受け手と目的が構成と内容に与える影響や、言語の変化が与える影響、文化的コンテキストにおける言語と意味の形成のされ方を考察する。ジェンダーや政治的権力、人権、歴史、宗教、タブーなど社会学的な視点からの分析が求められている。

パート2は広告、報道、論説、ブログ、SNSなどのメディアにおけるコミュニケーションのあり方を考察する。また、プロパガンダや風刺、キャンペーンなどを扱い、教育や政治やイデオロギーがメディアに与える影響を分析する。マスメディアが伝達する言語や映像の表現形式や文体を分析し、バイアスや情報の操作性、多様なオーディエンスの解釈を考察する。多様なメディアで表象される言語分析はメディア・リテラシー研究の領域を取り入れたものである。社会的文化的コンテキストをふまえ、世界情勢の見方やとらえ方に関わる視点を育むパートである。

パート3と4で扱う文学作品は「指定作家リスト」から選書する点ではDP「文学」と同様であるが、分析の観点が芸術性よりも歴史的社会的コンテキストを重視している点がやや異なる。パート3では、テキストが書かれた当時の出版状況、政治的圧力、社会の主流の価値観や考え方の影響などが作品のスタイルに与える影響を考察する。パート4では2、3冊の文学作品をとりあげ、語りの構造や登場人物の描かれ方、レトリックを詳細に分析し、比較考察の論文を最終課題とする。

4. 3. 3 最終課題

最終課題では、国際バカロレア機構の採点官が評価する外部評価と校内の指導教諭が採点したものを提出する内部評価がある。

DP「文学」の外部評価では、初見の課題文(散文、詩)の一つを選択して設問に答える論述試験のペーパー1と、出題された3問中から1つを選びパート3で学習した作品の中から2作品を選んで比較分析を行うペーパー2がある。制限時間は90分でいずれも3000字の記述が求められる。さらに、パート1の翻訳作品から1つを選び800字の概要と3000字の小論文の記述課題の提出が課されている。内部評価は、パート2の作品を扱う口述試験とパート4の中の2作品を

比較分析するプレゼンテーションが課されている。

DP「言語と文学」の最終課題では、外部評価課題は3つある。ペーパー1では、初見の課題文（ブログ、社説、新聞広告など）の二つのテキストを比較分析する論述課題が出される。ペーパー2はパート3で学習した文学作品を二つ選び、複数の問いから1問選択して答える小論文課題である。いずれも制限時間2時間である。また、「言語と文学」では4つのパートでそれぞれテキストについて2000字のレポートを4本書くことが課されており、その中の1本を記述課題としてIBOに提出する。内部評価はパート4の文学作品についての口述コメントリーとパート1, 2の内容に基づくプレゼンテーションが課題である。

両方の科目の最終課題で、共通して求められている要素は二つある。一点目は、分析批評のスキルである。レトリック、文学的技法、形式、文体、目的、オーディエンスの反応、文化的・社会的コンテクストなど、テキスト分析の概念を活用する力である。これらはMYPで提示された12の「関連概念」をベースとしている。二点目は、普遍的なテーマを見いだす概念操作のスキルである。最終課題の設問では、二つのテキストの共通点と相違点や、作品の教訓性、時代の価値観の反映、作中人物の成長、死など、作品に通底する普遍的なテーマを包括的にとらえ、分析することが求められる。個々の作品の要素やメッセージの要素を抽出し、分類し、吟味分析する力である。これは、MYPで提示された16の「重要概念」を理解する中で培われる力である。この普遍的なテーマを論じるスキルは、初等・中等の段階で、教師が提示するPYPの「中心的アイデア」やMYPの「探究テーマ」を探究する活動を通して、意識的に繰り返し、習得してきたものである。DPの最終課題では、学習者が12年間学んできた概念理解、概念操作の集大成が試されているのである。

5. 考察と今後の課題

以上のIBプログラム「言語A」のカリキュラム分析から得られた知見を元に、従来の国語科教育を照射し、今後の国語科教育が取り組むべき方向性を考察する。

国語科学習指導要領の指導目標は「読み・書き・話す・聞く」という言語活動を主体として構成されてきた。教科書教材の内容を中心に授業を組み立てる傾向にあった。テストでは、暗記をした知識の定着度と教師が指導した解釈の理解のレベルが試されてきた。「コンテンツ・ベース」のカリキュラムであった。

平成29年度新学習指導要領の改訂では、「コンピテンシー・ベース」として、「思考力・判断力・表現力」が前面に打ち出された。「読み・書き・話す・聞く」の言語活動はそれらの下位項目に位置づけられ、具体的な学習活動の手順が明記された。

しかし、課題解決で活用するスキルと人間性を統合したコンピテンシー・ベースのカリキュラムに対してWiggins & McTighe (2012) はスキルの重要性や、活用の効果や、活用すべき場面を理解するようになるためには、その基底にある概念を理解すべきであることを指摘している。つまり、習得したコンピテンシーを場面や状況に応じてより効果的に活用する思考の枠組みとしての「コンセプト」が必要なのである。

「コンセプト・ベース」のカリキュラムを導入することに伴い、教師には次にあげる4つの大きな転換が求められる。

1点目は、「指導観」の転換である。「コンセプト・ベース」カリキュラムでは教師主導でテキストの内容を教えるのではない。教師は学習者と共にテキストを通して普遍的なテーマについて、対話を通して理解を促し、概念の獲得を導くファシリテーターとなるのである。学習者の思考を深い学びに促すためには、学習者の発話に耳を傾け、要所所で問い直し、思考を揺さぶり、導いていかななくてはならない。教壇の上からの一斉指導とは全く異なる指導方法に、教師の意識を切り替えていくことが求められている。

2点目は、「教材観」の転換である。IB「言語A」では、「文学を教えること」「言語を文学で教えること」から発展し、「文学を通して世界の見方や関わり方を獲得すること」を目標としている。学習者はテキストを通して世界を学ぶのである。「グローバルな文脈」で示されたように、世界こそが学びの文脈ととらえれば、日常生活を取り巻くメッセージを表象したものが全てがテキストである。21世紀の今日、メディアに媒介され世界で流通するテキストは書字言語だけではない。デジタル技術の進展に伴い、映像、音声も含め、マルチモーダル・テキストがあふれている。つまり、活字主体の教科書教材からの脱却、社会に開かれた学びを促す新たな教材を開発する発想の転換が教師に求められている。

3点目は、「言語観」の転換、「視覚スキル」の導入である。2点目に挙げた新たな教材観に基づけば、「見ること」「見せること」の指導も重要となってくる。見たものを言語化し、表象分析し、再表象するスキルである。さらには、「聞くこと」においても、話し言葉を聞き取るだけでなく、音楽や効果音を聞き

取ることも含めていくべきである。音声、映像を意味を伝える記号としてとらえ、言語との往還によって、コミュニケーションスキルを發展させていくことが国語科教育で必要とされている。

4点目は「教科領域の枠組み」の転換である。「概念」のキーワードで、各教科の学びをつなぎ、学際的アプローチが成立することは本論で述べたとおりである。文学を用いた学習でも、「視覚スキル」の導入により、芸術科の映像、デザイン、音楽などの領域を取り入れることが必要となる。また、作品のコンテクストの分析では社会科の歴史・政治・倫理などの領域の知識を活用することになる。教科横断的に知識と知識を関連付け、概念を媒介として融合させ、知識を活用する力を育む必要がある。すでに、現行の学習指導要領においてはカリキュラム・マネジメントとして提唱されている。これからは、初等科に限らず、中等・高等の教師にも幅広く知見が求められる。

以上のように、IBが提唱する「コンセプト・ベース」カリキュラムは、日本の従来の教育になかたいたくつかの転換が求められている。これは、「主体的対話的深い学び」を目指す学習指導要領の方向性と一致しており、さらに推進させる上で「コンセプト・ベース」有効である。

今後の国語科教育の方向性は、概念に基づく見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、物事を多角的にとらえ吟味分析し、適切に表現する能力と、インターナショナルでグローバルな視野をもつ資質を育成することを目指すことにあると言えよう。

注

- 1) 文部科学省HP・大臣官房国際課国際協力企画室「国際バカロレアについて」(登録：平成23年07月) www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/

- 2) 国際バカロレア機構 (2016) 「探究とはどういうものなのか」『PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み』 p35
- 3) ガーゲン (2004) 『あなたへの社会構成主義』(東村知子：訳) ナカニシヤ出版

参考文献

- 国際バカロレア機構 (2015) 『IBの一貫教育プログラム 国際バカロレア (IB) の教育とは?』
- 国際バカロレア機構 (2016) 『初等教育プログラム PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み』
- 国際バカロレア機構 (2016) 『中等教育プログラム MYP：原則から実践へ』
- 国際バカロレア機構 (2014) 『中等教育プログラムMYP「言語と文学」指導の手引き』
- 国際バカロレア機構 (2014) 『DP：原則から実践へ』
- 国際バカロレア機構 (2014) 『ディプロマプログラム (DP) 「言語A：文学」指導の手引き』
- 国際バカロレア機構 (2014) 『ディプロマプログラム (DP) 「言語A：文学」教師用参考資料』
- 国際バカロレア機構 (2016) 『ディプロマプログラム (DP) 「言語A：言語と文学」指導の手引き』
- 文部科学省 (2017) 「第1章 第二節 国語」『小学校学習指導要領』 pp14-29
- 文部科学省 (2017) 「第1章 第二節 国語」『中学校国語科学習指導要領』 pp14-25
- 文部科学省 (2018) 「第2章 第一節 国語」『高等学校学習指導要領』 pp24-46
- Wiggins & McTighe, 西岡加名恵訳 (2012) 『理解をもたらすカリキュラム設計-「逆向き設計」の理論と方法』日本標準 p160

An Innovative Direction of Japanese Language Education using International Baccalaureate:

PYP • MYP • DP ‘Language A’ curriculum analysis

Sumiko NAKAMURA*

Japanese Language Education

(Received for Publication; August 27, 2018)

Abstract

The International Baccalaureate is world common educational program authorized as a university entrance exam qualification beyond the borders in 1968. The IB program is based on a theory of the constructionism and performs inquire learning by the principle of learner center. By “global context ,” the learner connects the significance of learning with the world present situation. The learner becomes able to understand a concept by setting “an important concept” and “a related concept”. In addition, the teacher sets “a central idea” (PYP) and “a inquire theme” (MYP) for a unit plan. It is universal, and the learner understands a concept with the versatility and learns the concept driven skill. The last tests of DP to utilize the concept driven skill, and to enunciate is assigned. The learner recognizes cultures from this skill and becomes global citizen with an International sensibility and global vision. the author suggest that we should revise the curriculum of the Japanese national language subject to a concept base from a competency base.

Key words: International Baccalaureate, Concept Understanding, Language and Literature, Japanese Education

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)